

## 第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本

立川 京一

はじめに

1945年3月9日、フランス領インドシナ(仏印)に駐屯する日本軍が「明号作戦」(正式名称「明作戦」)<sup>あきら</sup>を発動して仏印を武力処理した結果、フランスの主権は消滅した。そして、11日、バオ・ダイ帝は越南帝国の独立を宣言する。本稿はベトナムが70余年にわたるフランスの植民地統治から「最初の独立」を達成する過程において、日本(政府〔外務省〕、軍〔陸軍〕)および日本人(民間人)がいかなる役割を演じたのか、あるいは少なくとも、現地の独立運動勢力との間でどのような関係があったのかを明らかにし、ベトナムの独立過程と戦後の歴史認識について検討するものである。

我が国におけるベトナム独立運動研究はベトミン(ベトナム独立同盟)に焦点を当てたものが大半であり、それ以外の諸勢力、例えば親日系に分類される愛国党、大越党、越南復国同盟会、国社党、カオダイ教、ホアハオ教などを視野に入れたものはわずかしかない。ベトミンは終戦直後に「八月革命」を成功させるまで日本を抵抗の対象としており、日本とベトミンが少なくとも公式に連携することはなかった。したがって、ベトミンの活動を研究対象とした先行研究は、本稿が論じるような日本と独立運動との関係については言及していないのである。

尚、本稿はベトナムの独立への日本(人)のかかわりについて明らかにすることを主たる目的としているが、日本が戦争によってアジアから欧米の勢力を駆逐し、アジア諸国の独立をもたらしたと積極的に主張する「大東亜戦争肯定論」に必ずしも与するものではない。むしろ、日本は「大東亜共栄圏建設」や「アジア解放」を標榜しつつ戦争を遂行したにもかかわらず、それを実現させるための具体的な施策を有しておらず、日和見的、もしくは場当たりの対応に終始したということを改めて証明することになる。

広い視野をもって個々の史実を明確にしてゆく努力を積み重ねることによって、また、ベトナムの独立に日本(人)が関係しているという認識を共有することによって、歴史認識問題を緩和し、相互信頼醸成に寄与することこそが本稿の負う役割である。

## 1 仏印に対する日本の基本方針

太平洋戦争中の日本の仏領インドシナ（仏印）に対する基本方針を言い表わすキー・ワードは「静謐保持」である。仏印における「静謐保持」（略して「仏印静謐保持」）とは、フランスの行政機構をはじめ、警察、経済、教育、社会など内政に関しては、仏印進駐以前の状態を温存して一切をフランスに任せ、日本は仏印の内政に干渉しないということである。それと同時に、日本はインドシナにおける独立運動を支援しないということでもある。さらに、仏印を対中作戦の基地として使用しないように、中国軍の仏印に対する行動を惹起するようなことも慎むという点を付け加えることができよう。

この「仏印静謐保持」という思想は、仏印におけるフランスの主権維持と仏印領土の保全という原則を謳った「松岡＝アンリー協定」（1940年8月30日）を起源とするが、それが「金科玉条」とまで言われるほど政府・軍の確たる方針となったのは、北部仏印進駐時に発生した不祥事の影響が大きい。

元来、北部仏印進駐は「松岡＝アンリー協定」の精神にのっとり、「平和進駐」の実施を旨としていた。しかし、仏印当局が遷延策を試みたため、日・仏印間の現地交渉は難航を極めた。その間、「現地協定」の成立を訝った日本陸海軍中央は「九月二十二日零時以降平和的進駐ヲ実施」すること、そして、「万一佛印軍抵抗セバ武力ヲ行使」することで合意した（「佛印問題爾後ノ措置二關スル件」昭和15年9月13日）<sup>1</sup>。その後、進駐実施日は交渉期限後24時間の余裕を置き、「二十三日零時以降」となった<sup>2</sup>。そして、「現地協定」はまさに進駐開始時刻寸前の22日16時30分（日本時間）に成立したのである。

つまり、陸海軍中央は北部仏印進駐を実施するにあたり、「平和進駐」を旨としていたものの、仏印当局との交渉の成り行きによっては「武力進駐」をも想定していた。しかも、それにお墨つきを与えていたことになる。これは「武力進駐」を期待していた陸軍内の強硬派（参謀本部第1部と現地の南支那方面軍、印度支那派遣軍）を活気づけた。そして、先に述べたように、交渉期限は切れていたとはいえ進駐開始時刻寸前に「現地協定」が成立したため、本来ならば「平和進駐」に切り換えるべきところであったにもかかわらず、案の定、現地陸軍は協定成立の知らせを握りつぶして「武力進駐」を強行した。その結果、北部仏印国境地帯のドンダンとランソンで日仏両軍が交戦する事態に至る。そして、その影響がインドシナの独立運動にも波及するのであるが、これについては後述する。

このように、統帥の乱れによって、北部仏印進駐時に国境地帯で武力衝突が発生したことの

<sup>1</sup> 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 大本營陸軍部 大東亞戦争開戦経緯 2』朝雲新聞社、1973年、71～72頁。

<sup>2</sup> 同上、81、87頁。

衝撃は大きく、後日、関係者は処罰されている<sup>3</sup>。また、事態を重く見た大本営は、仏印当局との交渉を担当する仏印国境監視委員(「澄田機関」)の委員長に新しく任命された澄田睐四郎少将に対して両総長名で訓令を発した。澄田への訓令は対仏関係への悪影響を懸念して、爾後の仏印との交渉は「専ラ平和友好裡ニ」進めるよう念を押している<sup>4</sup>。一方、澄田も「佛印ノ静穩八帝國ノ所要物資取得上 對必要」との認識を有していた。また、澄田は安南民族の独立に関して、

民族自決モサルコトナガラ之將來ノコトナル而シテ指導機関ハ勿論佛國人モ最モ危惧シアルハ安南人ノ離反ニシテ而モ無力ナル安南人ニ對シ今直チニ宣傳謀略等ヲ行フモ効果少キノミナラズ之ヲ佛國側ニ察知セラルルハ火ヲ見ルヨリ明カニシテ.....安南人ニ對スル宣傳謀略ハ當分ノ間之ヲ実施セザルヲ可トスル意見(中略、立川)

であった<sup>5</sup>。このように「仏印静謐保持」の方針は早くも北部仏印進駐後には、仏印におけるフランスとの関係と独立運動への対応に関する日本の基本方針となったのである。

その後、この方針はより確固たるものとなっていく。例えば、大本営陸軍部は南部仏印進駐(1941年7月28日開始)後に「大陸指第九百二十四號」を発し、

六 特ニ軍紀風紀ヲ至嚴ニシ佛印側トノ無用ノ摩擦ヲサクルモノトス

八 安南獨立ノ謀略ハ之ヲ行ハサルモノトス<sup>6</sup>

と、「仏印静謐保持」の方針をあらためて現地駐屯部隊(第25軍)に指示している。

日本が「仏印静謐保持」を金科玉条とした裏には、主として軍部、とりわけ陸軍の意向が強く反映している。日本軍は南方作戦を遂行するうえで、後方の兵站・海運中継・資源供給それぞれの基地たる役割を担う仏印に関しては、その安定を維持することに重きを置いた。仏印が動揺し、いわんや戦場と化すようなことにでもなれば、その安定を確保するために相当な兵力を割かなければならなくなる。日本軍にはそのような余裕はなかった。したがって、いたずらに事を起こさない方が賢明と判断されたのである。

<sup>3</sup> 北部仏印進駐時の統帥にまつわる問題に関しては、中村明人「佛印進駐の真相」1954年5月(防衛研究所所蔵)、大井篤『統帥乱れて - 北部佛印進駐事件の回想 - 』毎日新聞社、1984年などを参照。

<sup>4</sup> 陸軍少将澄田睐四郎二與フル訓令(昭和15年9月30日)(陸軍省「昭和十五年陸支密大日記」第37号〔防衛研究所所蔵〕)。

<sup>5</sup> 澄田機関発次官・次長宛河内電第589号(昭和15年10月5日付)(同上)。

<sup>6</sup> 大陸指第924号(昭和16年8月12日付)(「指」第五〔防衛研究所所蔵〕)。

フランスの行政機構をそのまま温存した場合のメリットを考えてみれば、「静謐保持」の効用をいっそう良く理解できる。つまり、この場合、仏印の内政全般をフランスに任すことができるので、日本側はそのために人員を割かなくて済むわけである。不慣れな土地に、現地の言語を運用する能力に乏しい日本人を配するより、はるかに効率の良い統治が可能である。このように人的資源、統治の効率性に鑑み、既存の機構を温存し、それをそのまま活用した方が得策と考えられたのである<sup>7</sup>。

このようにして金科玉条となった「静謐保持」の方針に支えられた仏印における「日仏協力体制<sup>8</sup>」は、1945年3月9日に日本軍が「明号作戦」を発動するまで続く。そしてこの間、日本政府および軍部はベトナムの独立運動を公に支援することができなかつたのである。

## 2 「越南復国同盟軍<sup>9</sup>」と日本軍 - 北部仏印進駐前後 -

北部仏印進駐の実施部隊となった広東に司令部を置く南支那方面軍とその隷下にあつて南寧に位置していた第22軍は、「平和進駐」と「武力進駐」の両方の事態を想定して、というよりもむしろ、後者の「武力進駐」に備えて、態勢を整えていた。これがベトナムの独立運動家を悲劇に巻き込んでいく。

日本軍の仏印進駐に呼応して民衆が蜂起し、日本軍の力を借りてフランスの勢力を排除し、一気に独立を達成しようと考えたベトナム人独立運動家がいた。チャン・チュン・ラップである。ラップはベトナム独立運動組織「越南復国同盟会」の中心的活動家の一人で軍事面を担当していた。「越南復国同盟会」は日露戦争での日本の勝利に触発されて日本に渡り（1905年）、日本に学んでベトナムの独立を成し遂げようとする「東遊運動」を起こしたファン・ポイ・チャウと、チャウの説得に応じて、1906年にフエ（安南王宮所在地）を脱して日本に渡った安南皇族のクオン・デが結成した「維新会」とその後継の「越南光復会」の流れを汲む組織で、1939年に上海で結成された。代表は日本を拠点に活動を続けていたクオン・デであつた<sup>10</sup>。

<sup>7</sup> 白石昌也・古田元夫「太平洋戦争期の日本の対インドシナ政策 - その二つの特異性をめぐって - 」『アジア研究』第23巻第3号（1976年10月）4～7頁。

<sup>8</sup> 立川京一『第二次世界大戦とフランス領インドシナ - 「日仏協力」の研究 - 』彩流社、2000年を参照。

<sup>9</sup> 白石昌也によると、クオン・デは回顧録の中で、「越南復国同盟軍」という名称ではなく、「ベトナム建国軍」と呼んでいる（白石昌也「ベトナム復国同盟会と1940年復国軍蜂起について」、『アジア経済』第23巻第4号（1982年4月）23頁）。また、内川大海は「復国独立軍」「ベトナム独立軍」という呼び名も用いている（内川大海『シルクロードの夢 - ある青春の記録 - 』私家版、1993年、79、81頁）。

<sup>10</sup> 白石「ベトナム復国同盟会」24～33頁。ファン・ポイ・チャウと東遊運動については、白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア - ファン・ポイ・チャウの革命思想と対外認識 - 』巖南堂書店、1993年、内海三八郎（千島栄一・櫻井良樹編）『藩佩珠伝 - 日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯 - 』芙蓉書房出版、1999年などが詳しい。

チャン・チュン・ラップはいかにして日本側と接触し、自らの存在と活動を認知させたのであろうか。これには2つの説がある。クオン・デの「自伝」と「越南復国同盟会」幹部のホアン・ナム・フンの回想録などに基づく白石昌也の研究によると、フンら「越南復国同盟会」のメンバーと知り合いであった和知鷹二（1940年3月9日、少将に進級）にクオン・デが依頼して、広州の日本軍当局への紹介状を貰い、その紹介状を通じて広東特務機関長・中野英光少将に会い、中野から協力を打診され、それに同意したという<sup>11</sup>。一方、内川大海（台湾拓殖株式会社の子会社・沢山商事の駐在員としてハノイに居留し、北部仏印進駐時に日本軍を支援した。）と西川捨三郎（ペンネーム、寛生）（印度支那派遣軍に通訳として従軍していた。）の回想記によれば、沢山商事の現地代表で、同じく台拓の子会社で仏印現地法人であった印度支那産業株式会社重役の山根道一が知り合いの第22軍参謀でハノイに本部を置く仏印国境監視委員（「西原機関」）の一員でもあった中井増太郎大佐に依頼し、同大佐を通じて、ラップらを第22軍参謀・権藤正威中佐のもとへ送り込むことに成功したという<sup>12</sup>。

いずれにしても、ラップらの日本軍への参加は現地軍、あるいはその参謀レベルの判断で認められたのであり、一次資料がないため立証は困難であるが、陸軍中央は関知していなかったと思われる。

ラップらが南寧の第22軍に合流したのは、1940年7月末、乃至、8月上旬であった。また、台拓・印度支那産業社員で、ラップらが組織する「越南復国同盟軍」の顧問格となる氏原進と増井準一が軍囑託の身分で、すでに南寧入りしていた。南寧到着時、ラップら一行は3、4人、あるいは8人程度の極めて少人数であった<sup>13</sup>。「復国同盟軍」はここからスタートした。総司令にはラップが就いた。副司令に関しては、ホアン・ルオン説<sup>14</sup>とゴ・フォン・チン説<sup>15</sup>とがある。「復国同盟軍」は日本軍の北部仏印進駐とともに国境を超えて、仏印へ入る計画であった。そして、先に述べたように、蜂起してハノイを目指し、一気に独立を達成する所存であった。ラップはハノイを立つ前、山根道一にクオン・デを元首に戴く独立政府の閣僚名簿を託していたという<sup>16</sup>。

9月23日、国境地帯に勢力を増やしつつ展開していた「復国同盟軍」は日本軍の進駐開始とともに、その先導役として仏印領内に入った。「復国同盟軍」は先んじてドンダンの仏印軍

<sup>11</sup> 白石「ベトナム復国同盟会」30頁。

<sup>12</sup> 内川『シルクロードの夢』14頁、西川寛生「ヴェトナムの日本人 - その知られざる記録 - (1)」社アジア親善交流協会『研究資料』No. 1 (1995年6月) 24頁。

<sup>13</sup> 白石「ベトナム復国同盟会」37頁、西川「ヴェトナムの日本人(1)」24～25頁。氏原が軍囑託となるに際し与えられた任務とは、「北部仏印進駐誘導、及び越南復国同盟会指導並に仏領印度支那軍民動向牒報」であったという（白石「ベトナム復国同盟会」39頁）。

<sup>14</sup> 白石「ベトナム復国同盟会」38頁。

<sup>15</sup> 内川『シルクロードの夢』74頁、西川「ヴェトナムの日本人(1)」24頁。

<sup>16</sup> 西川「ヴェトナムの日本人(1)」29頁。

兵営内に潜入し、ベトナム人兵や山岳民族兵に対して帰順工作を行い、フランス人将校の手前、日本軍に対して抵抗する振りをするにせよ、狙撃はしないよう打ち合わせた。ドンダン陥落後、兵営内からベトナム人兵、山岳民族兵、あわせて約1,000人が武器弾薬を携えて「復国同盟軍」に合流した。また、ランソン攻略の際にも、「復国同盟軍」は市内の混乱防止と治安維持に貢献した。その声望に近隣在住の農民や地方の青年たちが馳せ参じ、「復国同盟軍」の勢力は1,500～2,000人にまで膨れ上がったという<sup>17</sup>。

ところが、現地協定成立により「平和進駐」の目処が立ったことと何より現地陸海軍の協同不調を理由に陸海軍中央が現地軍の作戦を一時中止する決定を下したことから、状況が180度、変わってしまった。「復国同盟軍」の蜂起は日本軍の「武力進駐」を前提としていた。その日本軍が武力行使を即時中止して「平和進駐」を完全実施することになったのである。その結果、「復国同盟軍」は日本軍からの支援を得られなくなってしまった。

「復国同盟軍」は計画の再考を迫られた。氏原と増井は「復国同盟軍」単独でのハノイ進軍に反対し、計画を全面的に変更して、しばらくは国境の山岳地帯が沢山商事が鉄鉱山開発事業を進めているタイグエンを拠点にゲリラ戦を展開してはどうかとラップらの説得を試みた。ハノイからランソンに急行した中井大佐も説得に加わった<sup>18</sup>。しかし、ラップらは説得に応じず、当初の計画通り、ハノイへ進撃する意志を変えなかった。それは自殺行為であった。12月3日、「平和進駐」という方法で仏印・中国国境地帯からハイフォン方面へと向かう日本軍の最後の部隊がランソンを後にした。それと前後して、ラップらは蜂起し、途中、義勇民兵を集めて勢力を拡大しつつ、一号国道をハノイに向けて南下した。しかし、すでに、日本軍と入れ替わりにフランス軍がランソン方面へ復帰してきていた。山峡の隘路で「復国同盟軍」を待ち構えていたのはフランス軍外人部隊などであった。訓練と装備に乏しい「復国同盟軍」はフランス軍の一斉射撃の前に抵抗する術もなく、四散・潰走を余儀なくされた。敗走して中国領内に逃れた者もいたが<sup>19</sup>、大部分は戦死、もしくは、国境の山岳地帯に身を隠したとされる。ラップはフランス軍に捕らえられ、12月26日、ロクビン郊外で銃殺された<sup>20</sup>。その後、「復国同盟軍」の残党は中国国民党系の「越南国民党」やベトミンなどの反日ベトナム独立運動組織に身

<sup>17</sup> 白石「ベトナム復国同盟会」38頁、内川『シルクロードの夢』79頁。

<sup>18</sup> この時、ホアン・ルオンら一部が説得に応じて中国へ向かったとする説がある（白石「ベトナム復国同盟会」38頁）。

<sup>19</sup> チャン・チョン・キムによれば、この時、ホアン・ルオンを含む約700名（うち女性40名）が中国方面に難を逃れたという（陳仲金〔陳荆和訳〕「風塵のさなかに - 見聞録 - (二)」『創大アジア研究』第2号〔1981年3月〕189頁）。

<sup>20</sup> 白石「ベトナム復国同盟会」38頁、内川『シルクロードの夢』79～80頁、西川「ヴェトナムの日本人(1)」26頁、西川寛生「ヴェトナム『復国』秘史」『流れ』第27巻第12号（1979年12月）31頁。仏印当局は当初、日本側がラップの引き渡しを要求してくるのではないかと危惧から、ラップは戦死したと発表していた（西川「ヴェトナム『復国』秘史」31頁）。

を委ねた者が多いと言われている。この時、生き永らえたラップの子息が、のちにベトミン政府の高官になったという話も伝えられている<sup>21</sup>。

日本軍と直接的な関係が明白となっているのは「越南復国同盟軍」のみであるが<sup>22</sup>、日本軍の北部仏印進駐に刺激されたベトナム独立運動勢力は「復国同盟軍」だけではなかった。日本軍の進駐直後、ランソン西方のバクソンで住民が蜂起した。また、その後しばらくしてから、ハノイ東方でも「安南独立革命軍」が蜂起している。ベトナム南部では、タイニンに本部を置くカオダイ教が武装蜂起を試みた。しかし、いずれもフランス軍に鎮圧されている<sup>23</sup>。蜂起した民衆には多かれ少なかれ日本軍の介入と支援を期待するところがあった。しかし、先に述べたように、フランスから協力を得ることを優先し、独立運動には関与しないという方針を固めていた日本軍は、こうした民衆の期待に応えることはできなかった。仏印派遣軍参謀長・長勇大佐はカオダイ教の蜂起とそれに対するフランスの徹底的な弾圧に関して陸軍省へ報告するに際し、部分的に多少大げさな表現も見られるが、次のように「民心ノ趨向」を伝えている。長は現地人の蜂起に対する日本軍の傍観姿勢が現地における対日世論に悪影響を及ぼすであろうことを、相当、憂慮していたものと思われる。

……佛人ニ對スル怨嗟ノ聲ハ各地ニ瀰漫シアルモ又對日輿論是正ノ必要ニ迫ラレアルモノノ如ク親日熱ハ漸次低下ノ趨勢ニアルヲ窺知セラルル現況ニ在リ

全地方(コーチシナ)一帯ノ住民ハ唯々絶望、暗澹ノミニシテ回生ノ色ナシ佛當局ノ絶對的抑圧ト武力ノ下ニ屏息シアルノ現状ナルモ「今ゾ日本未援ノ秋」ト最后ノ希望ヲ皇軍ノ援助ニ托シアルモノノ如シ(括弧内、立川)<sup>24</sup>

<sup>21</sup> 内川『シルクロードの夢』81頁、西川「ヴェトナム『復国』秘史」31頁。

<sup>22</sup> 北部仏印進駐時、日本は台湾において「越南復国同盟会」の主要メンバーからなるベトナム語放送班をも組織していた(白石「ベトナム復国同盟会」33～36頁)。

<sup>23</sup> 桜井由躬雄・石沢良昭『東南アジア現代史』3。(世界現代史7)山川出版社、1977年、150～151頁、佛印派遣軍参謀長長勇大佐陸軍次官阿南惟幾宛印軍情第18号(昭和16年1月8日付)(陸軍省「昭和十六年陸支密大日記」第4号〔防衛研究所所蔵〕)、佛印派遣軍参謀長長勇大佐陸軍次官阿南惟幾宛印軍情第120号(昭和15年12月28日付)(陸軍省「昭和十六年陸支密大日記」第6号〔防衛研究所所蔵〕)。

<sup>24</sup> 前掲、佛印派遣軍参謀長長勇大佐陸軍次官阿南惟幾宛印軍情第120号。長は半年後には「大勢ハ依然トシテ熱烈ナル日本依存心ヲ保藏シアリ」と伝えている(佛印派遣軍参謀長長勇大佐陸軍次官木村兵太郎宛印軍情第353号〔昭和16年5月9日付〕〔陸軍省「昭和十六年陸支密大日記」第17号、防衛研究所所蔵〕)。

### 3 独立運動と日本の関係

#### (1) 民間レベルにおける独立運動支援

「静謐保持」が日本の対仏印施策の基本方針となったことは「大東亜共栄圏建設」「アジア解放」を標榜して戦争を遂行せんとする日本がベトナムにおける独立運動を支援するうえで極めて大きな障害となった。外交官や軍人は表立った支援はおろか、現地人との日常的な接触すらも慎重にせねばならなくなった。したがって、独立運動への支援は現地人の独立運動に共鳴する仏印在留邦人があくまで政府や軍とは無関係な個人の立場で行わざるを得なかった。

「北の山根、南の松下。」「山根の知謀、松下の俠気。」いずれも第二次大戦中にインドシナ、特にベトナムの独立運動を支援した二人の日本人、山根道一と松下光廣を知る在留邦人の間で聞かれた評判である。

「北の山根」は先に述べたように沢山商事や印度支那産業会社という台拓の子会社のハノイにおける代表であった。1937年に仏印に赴任して以来、山根は実業家として鉱山開発などの事業を取り仕切るかたわら、主としてハノイを中心に活動する幾人もの現地人独立運動家の信頼を得、親しい関係を築いていた。その一人が先述したチャン・チュン・ラップであったわけである。

山根は自宅を事務所にして「印度支那経済研究所」を設立した。そこは多数の有識者が交流する場となった。日本人、ベトナム人に限らず、フランス人も出入りした。また、経済人、学者、文学者だけでなく軍官民さまざまな分野の人物が訪れた。有名な独立運動家では、愛国党のグエン・スアン・チュー、レ・トアン、大越党系のチャン・バン・ライ、ズオン・パ・チャクのほか、チャン・チョン・キムやゴ・ジン・ジェムも顔を覗かせていたという<sup>25</sup>。また、ハノイ大学の新進気鋭の学者や学生たちも研究所を訪れていた。その筋を伝って、ベトミン関係者も足を運ぶようになった<sup>26</sup>。

日本人では、近江谷、小松清といった日本文化会館関係の人物が出入りしていた。日本文化会館館長は元駐カイロ公使の外交官・横山正幸であった。近江谷によれば、横山は近江谷の中学校の先輩にあたり、近江谷と小松の「独立運動派気分を充分のみこんでくれていた<sup>27</sup>。」もちろん、近江谷らが山根の研究所を訪れたのは職務としてではなく、山根との個人的なつき合

<sup>25</sup> 西川「ヴェトナムの日本人(1)」30～31頁。

<sup>26</sup> 西川寛生「ヴェトナムの日本人 - その知られざる記録 - (2)」社アジア親善交流協会『研究資料』No. 4 (1996年2月) 60頁。

<sup>27</sup> 小牧近江『ある現代史 - “種蒔く人” 前後 - 』法政大学出版会、1965年、162ページ。小牧近江は近江谷のペンネーム。



い故であった<sup>28</sup>。

しばらくして、山根は日本へ帰国した。そのあとを引き継いだのが、大川周明が主宰する満鉄東亜経済調査局付属研究所（通称「大川塾」）第1期生で、当時、所員として印度支那経済研究所に起居していた原田俊明である。仏印当局は研究所が独立運動に利用されているとして治安維持の名目で何度も研究所の閉鎖を迫った。しかし、原田はこうした圧力に屈することなく、研究所を訪れる独立運動家との接触を続けた。そうこうするうちに、既存の独立運動ではもはや民衆の支持を得られないのではないかという疑問を抱きつつあった原田は次第にベトミンに関心を持ち、接近をはかるようになっていった<sup>29</sup>。

一方、「南の松下」はサイゴンに本社を置く仏印現地法人・大南会社の社長であった。松下が仏印へ渡ったのは1912年、満15歳の時である。そこから身を起し、10年後の1922年に独立して大南会社を設立した<sup>30</sup>。

ちょうどその前年に亡命中の安南皇族クオン・デを知り、文通を始めたのが、松下が独立運動と本格的なかかわりを持つ契機となった。もっとも、クオン・デと松下の対面は1928年に両者が台湾を訪れる時まで待たなければならなかったが、こうして松下は仏印現地におけるクオン・デの代理人のような存在になっていく。クオン・デも松下を信頼して協力を求め、松下を介して、越南復国会系の独立運動家と連絡をとるようになった<sup>31</sup>。

独立運動家とのつながりが災いして、1937年、日本に一時帰国していた松下に対してフランスはスパイ罪で国外追放措置を講じる。松下の留守宅を捜査した際に海図が発見されたのが、その理由であったが、松下を独立運動勢力から遠ざけたかったというのがフランスの本音であったろう。結局、松下が仏印に再び足を踏み入れるのは南部仏印進駐後のことになる。これは日本の仏印派遣軍海軍委員長・中堂観恵少将の尽力による。ところが、意外なことに、日本政府は松下の仏印復帰を好ましく思っていなかったらしく、軍の命令と称して旅券発給をしばらくの間、停止したという。おそらく、フランスとの関係に配慮したのであろう。松下が現地の政治問題に関与しないことを誓約し、かつ、海軍が保証したため、ようやく渡航が許されたらしい。陸軍（含、憲兵隊）が全員ではないにせよ、基本的に松下を好ましく思っていなかったのも確かなようである<sup>32</sup>。

松下はゴ・ジン・ジェムとも戦前から親交があった。1943年10月中旬、フランス官憲による独立運動弾圧の手がジェムに及ぼうとしていた。この時、ジェムはフエに住まっていたのであるが、危険を事前に察知すると、ジェムは松下を頼ってサイゴンへ難を逃れた。松下は大南

<sup>28</sup> 西川「ヴェトナムの日本人（1）」30頁。

<sup>29</sup> 西川「ヴェトナムの日本人（2）」60頁。

<sup>30</sup> 北野典夫『天草海外発展史』下、芦書房、1985年、236～40頁。

<sup>31</sup> 同上、263～64頁。

<sup>32</sup> 同上、247～48頁、中堂観恵「松下社長とわたし」（1977年11月）6頁。

会社社員の西川捨三郎、三浦琢二、片野健四郎に命じて、鉄道で南下してきたジェムをファン・ランで保護させている。サイゴンでしばらくの間、ジェムは大南会社の社宅に匿われた<sup>33</sup>。その後、状況が落ち着くと、ジェムは列車でフエに戻ることになる。この時、ジェムに同行したのは小松清であった。隣の座席に座った画家の関口俊吾によると、小松は関口に、万が一のために連れのベトナム人には日本のパスポートを持たせてあると語った。日本文化会館が催す美術展の用向きで仏印にやってきたばかりの関口であったが、パリ在住が長く、達者なフランス語でフエに着くまでジェムと親しく会話を交わした。別れ際にジェムの方から名を名乗ったという<sup>34</sup>。

松下はチャン・チョン・キムの亡命の際にも手を貸している。1943年10月末、医師チャン・バン・ライが逮捕されたとの報に接した日本側（憲兵隊）はキムに身柄の保護を申し出た。キムは最初これを拒んだが、憲兵隊が帰った後、「今晚にもフランス側は先生を逮捕にくると思います。……もし明日一日何事もなければ、お宅に帰られてもいいではありませんか」（中略、立川）という知り合いの日本人の説得で、その人物の自宅に一晚身を寄せた<sup>35</sup>。「大川塾」第2期生の梶谷俊雄が書いた回想記によると、この時、キムが泊まったのは大南会社の社員宿舎であったという<sup>36</sup>。

結局、キムは翌日から憲兵隊に身柄を委ねることになり、同じように日本の保護を受けたズオン・バ・チャクとともにハノイのホテルで数日を過ごした。さらに、ハノイ憲兵隊長・大島親光少佐の勧めで二人はシンガポールへ亡命することになった。12月、ハノイから列車でサイゴンへ移動したキムは憲兵隊で12日間、そして、大南会社の社宅で19日間過ごしてから、シンガポールへ渡っていった<sup>37</sup>。

1945年1月、キムはさらにバンコクへ移動する。そこでクオン・デの子息二人と会う。彼らも日本軍に保護されて仏印を脱し、バンコクに亡命していたのである。また、同地でキムのところへ頻りに顔を出していた国社党のグエン・バン・サムも松下の支援を受けていた<sup>38</sup>。同年3月末、キムは独立を果たした越南帝国へ戻ってくるが、その時もサイゴンで松下の世話に

<sup>33</sup> 三浦琢二「私の戦前戦中の略歴」『みんなみ』南方会（1992年5月）19～20ページ。

<sup>34</sup> 関口俊吾氏への聞き取り調査。

<sup>35</sup> 陳仲金（陳荊和訳）「風塵のさなかに - 見聞録 - （一）」『創大アジア研究』創刊号（1980年3月）155～56頁。「知り合いの日本人」とは誰であろうか。キムの回顧録を翻訳した陳荊和は山根道一ではないかとしている（同上、177頁）しかし、山根のもとにいた「大川塾」第1期生の原田俊明や大南会社社員でキムの家に入出入りしてキムの令嬢に日本語を教えていた「大川塾」第2期生の山口知己であった可能性もある。

<sup>36</sup> 梶谷俊雄「大東亜戦中・直後のベトナム独立戦争 - 還らざる南の勇士六名と陳重金氏を偲んで - 」『みんなみ』No.25、南方会（1994年7月）22頁。

<sup>37</sup> 陳「風塵のさなかに（一）」156～59頁。

<sup>38</sup> 同上、168ページ、北野『天草海外発展史』下、263頁。

なっている。松下の自宅の前にある国社党の2階の広い部屋を松下に紹介してもらい、そこでフエへ赴くまでの3夜を過ごしている<sup>39</sup>。

第二次大戦中、松下がもっとも力を入れたのが、ともにクオン・デの息のかかった組織である越南復国同盟会とカオダイ教の支援であった。両勢力は松下の仲介で1943年に提携を実現している。両組織にとって松下はクオン・デの代理人であり、連絡窓口であった。彼らの忠誠心はおのずと松下にも向けられた。また、松下は終戦前の7月8日、第38軍からカオダイ教徒2,500人以上からなる「奉仕隊」の編成を任せられ、終戦まで、その隊長を務めている<sup>40</sup>。松下は以上述べたような独立運動の支援を大南公司の経費ではなく、すべて私財を投じて行ったのである<sup>41</sup>。

## (2) 外務省(大東亜省)の構想と限界

日本の対仏印方針にもっとも行動を制約されたのは外務省(大東亜省)であった。とりわけ、1943年4月、重光葵が外相に就任して「大東亜新政策」の名のもとに日本の戦争目的であった「アジア解放」の実現を目指すようになると、なおさらこの「仏印静謐保持」という制約が重くのしかかってきた。作戦上、南方戦線の後方兵站基地となっている仏印の安定を強く欲する陸軍が「静謐保持」の基本方針に固執し、重光が意図する「安南独立」に真っ向から反対したのである。重光が外相に就任して以降、大東亜会議後の1943年12月から翌年1月にかけての時期、1944年8月25日のパリ解放直後の時期、同年11月の大東亜宣言一周年の時期というように再三にわたって対仏印施策が再検討の対象となっている。しかし、その都度、陸軍の主張が通り、「仏印静謐保持」が堅持されるのである<sup>42</sup>。

仏印現地を預かる芳沢謙吉仏印特派大使は、フランス側との交渉の場ではおくびにも出さなかったし、また、公式には外交方針を逸脱するような行動もとらなかったものの、本音では「安南独立」を支持していたと思われる。芳沢が日本に亡命していたクオン・デを支援していた犬養毅の女婿であることがどれほど影響したかは定かではない。しかし、戦後、ついにベトナムへ帰れぬまま、1951年4月6日に日本で客死したクオン・デの葬儀が護国寺で執り行われた際、芳沢はそれに参列していることから、二人の間で何らかの接点があったことは十分に想像

<sup>39</sup> 陳「風塵のさなかに(一)」174、176頁。

<sup>40</sup> 信阪後第23号「高台教奉仕隊編成二關スル件」(昭和20年7月8日付)(北野『天草海外発展史』下、267頁)同文書に認印を突いている第38軍参謀・加登川幸太郎中佐の想像では、この命令は同軍参謀長(幸道貞治大佐)名で発されているが、同軍高級参謀・林秀澄憲兵大佐の発案ではなかったろうか(加登川氏への聞き取り調査)。

<sup>41</sup> 竹崎宇吉氏への聞き取り調査。

<sup>42</sup> 立川『第二次世界大戦とフランス領インドシナ』157～59頁。

できるのである。

芳沢が「安南独立」を支持する立場にあったことは、大本営陸軍部第20班（いわゆる「戦争指導班」）の業務日誌である「機密戦争日誌」の記述にも現れている。1944年1月29日、帰朝中の芳沢は陸軍省を訪れ、次のように述べた。

佛印二対スル帝國ノ態度ハ佛本國「ヴィシー」政府ノ存在ノ有無ニ依リ決スルヲ可トシ「ヴィシー」無クナリタル場合、依然現佛印ノ統治組織ノ活用ヲ企圖スルモ無駄ナリ此際ハ明瞭ニ安南人ニ対シ、独立ノ希望ヲ與ヘ將來ニ望ミヲ懷カシムルコトカ得策ナリ<sup>43</sup>。

仏印特派大使として当然の責務であろうが、芳沢は仏印現地における独立運動の動きに関心を持っていたことを証明する動きを見せている。通常はハノイの大使府に駐在している芳沢ではあったが、年に1度か2度、サイゴンを訪れることがあった。ハノイ＝サイゴン間を往復する途中、芳沢は王宮のあるフエに1泊した。フエには日本の領事館があり、そこに石田昌男書記生がいた。石田は領事館が情報収集のために雇傭していたトン・タク・タットの口利きで、領事官邸近くのマンカ川縁に住んでいたゴ・ジン・ジェムと知り合った。ジェムのところへは独立運動に関する情報が各地から寄せられていた。石田はそうした情報をジェムから仕入れていた。ベトナム人の情勢を本省に伝えるという作業は、当初、河面繁松領事代理が行っていたのであるが、河面の離任後、石田が引き継いだのである。芳沢はフエの領事館を訪れた際には、石田から独立運動に関するブリーフィングを受けた。河面の後任の浦部清治領事は石田がジェムと接触するのを好ましく思っておらず、石田が勝手にやっているのであって自分は関係ないと周辺には述べていたようである。しかし、石田の表現を借りれば、芳沢はジェムとの接触について「やめるようにとは言わなかった」のである。また、在サイゴン総領事・蓑田不二夫も、情報を聞くために、時々、石田のもとを訪れていた<sup>44</sup>。

ジェムが石田を頼りにしていたことを証明する事件が1944年7月に起きた。前年に続き、フランス官憲の手がジェムに及ぼうとした際、ジェムは石田の自宅に逃げ込んだのである。石田は自分の力では守りきれないと判断して、不本意ではあったがやむを得ず、知り合いの山野泰典憲兵大尉（ツーラン憲兵隊長）に連絡した。そして、結論としてサイゴン憲兵隊がジェムの身柄を預かることになった。フエからサイゴンまでジェムを護送する手配をしたのは、印度支那駐屯軍渉外部に勤務していた林秀澄憲兵中佐である。林は同軍司令官・町尻量基中将与と参謀長・河村参郎少将から命令されたのである。この時、町尻は林にジェムの人となりについて

<sup>43</sup> 参謀本部第20班（第15課）「機密戦争日誌」昭和19年1月29日（防衛研究所所蔵）。

<sup>44</sup> 石田昌男氏への聞き取り調査。石田によれば、小松清も石田のもとを訪れており、ジェムを小松に紹介したのも石田である。

語り、さらに、ビルマのようにイギリス軍の空挺部隊がラオスの平原に降下してくるような事態となった場合には民族運動を起こす必要があり、その中心にジェムを利用したいという考えを披瀝した。ジェムは日本軍の軍曹の服を着て憲兵に変装して、本物の憲兵6人と一緒にトラックに乗ってフエを脱出してツーランへ向かい、そこから日本軍機でサイゴンへ飛び、陸軍病院に匿われた。以降、ジェムは林と協力して仏印武力処理後の統治計画を作成することになる(後述)<sup>45</sup>。

芳沢に話しを戻そう。芳沢はサイゴンでは大南公司本社を訪れ、松下光廣と会っている。サイゴンの大南公司には在サイゴン総領事館員(おそらく、独立運動に好意的であった蓑田総領事や田代重徳公使らであったと思われる。)や東京から出張してくる大東亜省事務官・永井三樹三がたびたび顔を覗かせていた。芳沢が訪れる際にもこうした面々が集まり、松下のところに集まってくる情報と芳沢が石田から聞いた話、さらには小松清から寄せられた情報などを総合分析したり、独立後の政治体制について意見を交わしたりした。松下のところへは日本に亡命しているクオン・デからたびたび書簡が届いていたので、クオン・デの近況についても話題にのぼったと思われる。芳沢らはベトナムが独立を果たした暁には、クオン・デを迎えて国王とし、首相にはゴ・ジン・ジェムに就いてもらうという構想を描いていた。また、協議内容が外部にもれることを警戒して、クオン・デを「南」、ジェムを「西」、松下を「東」、小松を「北」というように隠語を用いて会話を交わしていた<sup>46</sup>。

日本軍の仏印進駐以降、仏印現地における日本語熱が急速に高まり、日本語を習いたいという現地人が増えた。日本側もこれに応え、ハノイ、フエ、サイゴンなどに日本語学校を開設した。ハノイでは外務省から仏印に留学生として派遣されていた井上吉三郎、小林慶三、寺川和伸らが教員となって日本語を教えた。仏印当局はこの日本語学校を独立運動の温床として警戒した。仏印側は日本人と現地人との接触のすべてに注意を払っていたが、日本語学校への反応はとりわけ厳しかった。そのため、石田書記生がフエに日本語学校を開設しようとしても、フエ市長はなかなか許可しなかった。確かに、小林がハノイにおける大物独立運動家チャン・バン・ライの家に下宿していたこともあって、仏印側がいっそうの疑いを抱いたと考えられなく

<sup>45</sup> 石田氏への聞き取り調査、林秀澄「インドシナ三国独立の経緯」『同台クラブ講演集』編集委員会編『昭和軍事史秘話』- 同台クラブ講演集 - 』中、同台経済懇話会、1989年、382～87頁、石川良孝「駆け出し外交官の戦時下仏印体験記 - 昭和18年9月～昭和21年5月 - 』『軍事史学』第32巻第2号(1996年9月)47頁、富永豊文「血ぬられしクーデター」田村吉雄編『秘録大東亜戦史 マレー・太平洋島嶼編』富士書苑、1953年、157頁。

<sup>46</sup> 竹崎宇吉氏への聞き取り調査。

はない<sup>47</sup>。

また、日仏の友好親善と日本の文化を仏印に紹介することを目的にハノイとサイゴンに設置された日本文化会館もフランス官憲の目には日本の独立運動支援や情報収集のための機関と映った。もっとも、近江谷 が事務局長で、小松清も出入りしていたとなれば、フランス側の疑いも故なきものとは言えない。

こうして見てくると、外務省(大東亜省)関係者が独立運動に深く関与するということはむしろかしかったと思われる。ゴ・ジン・ジェムと親交のあった石田やチャン・バン・ライ宅に下宿していた留学生の小林などを除き、日本の外交官が直接、大物独立運動家と交渉の機会を持つことはまずなく、松下のような民間人や文化会館関係者であっても小松のように正規の外交官ではない者を通じて独立運動に関する情報を入手する程度にとどまっていたものと見るのが妥当であろう。

### (3) 日本陸軍と独立運動

陸軍中央は「大東亜共栄圏建設」、「アジア解放」を謳い文句に戦争を推し進めながら、「仏印静謐保持」に固執し続けていた。しかし、その裏で、仏印現地では憲兵隊が比較的早い時期から独立運動諸勢力に接近を試みていたことは注目に値する。

いくつかはすでに述べたように、憲兵隊はフランス官憲の弾圧の対象となり逮捕されそうになった独立運動家を何人も保護している。チャン・チョン・キム、ズオン・バ・チャク、ゲン・バン・サム、ゴ・ジン・ジェム、ゲン・スアン・チュー、さらにはクオン・デの二人の子息も憲兵隊の庇護を受け、キムのように国外に亡命したり、ジェムのように陸軍の施設に匿われたりしている。

また、憲兵隊はフランスの激しい弾圧に遭っていた新興宗教団体にも接近している。仏印当局はホアハオ教の教祖フィン・フ・ソをサイゴン南方のバク・リユーに監禁していた。ところが、1942年はじめ頃から信者がそこに集まるようになったため、仏印当局はフィン・フ・ソをラオスへ移動させることにした。その矢先の10月12日、憲兵隊はホアハオ教信者数人と謀って、フィン・フ・ソをバク・リユーから逃亡させることに成功した。そして、サイゴン憲

---

<sup>47</sup> 井上吉三郎氏、小林慶三氏、石田氏への聞き取り調査。石田は日本語学校設立の一件が、相当、腹に据えかねていたのか、「明号作戦」時に拘束したフエ市長デマトネーを殴りつけた。そのために、石田は終戦後、サイゴン軍事法廷でB C級戦犯として裁かれ、禁固10年の判決を受け、プロ・コンドール島に収監された。同島で約5年間過ごしたのち、巢鴨プリズンへ移された(石田氏への聞き取り調査、富永「血ぬられしクーデター」154頁、茶園義雄編・解説『B C級戦犯中国・仏印裁判資料』〔B C級戦犯関係資料集成14〕不二出版、1992年、293頁)。また、「明号作戦」の際に石田から捕虜の見張りを頼まれた在フエ領事館員・山崎剛太郎も石田と同じようにサイゴン軍事法廷でB C級戦犯として裁かれ、禁固5年の判決を受け、プロ・コンドール島で刑に服した(山崎氏への聞き取り調査)。

兵隊付近に匿ったのである<sup>48</sup>。憲兵隊がホアハオ教に接近したのは、この組織を何らかの形で利用できればと考えたからにほかならない。しかし、ホアハオ教はそれほど多くの信者を抱えてはおらず、組織も強化されていなかったため、貢献にはおのずと限界があった。

憲兵隊が接近した最大の勢力はカオダイ教である。カオダイ教は1940年秋から翌年にかけて仏印当局の大弾圧を受け、本部のあったタイニンを離れ、ブノンペンへ難を逃れていた。憲兵隊のカオダイ教への接近はこのブノンペン時代に始まった。当初、日本側がカオダイ教側に期待したのは、仏印軍の動向に関する情報収集であった。カオダイ教はベトナム各地に駐屯する仏印軍の数や移動の状況、さらには連合軍側との連絡の有無などの情報を集めて日本側に提供した。行商をしながら情報収集を行った女性信者の行動を疑うフランス人はおらず、その活躍は顕著であった。こうしたカオダイ教側の協力に対し、日本側はカオダイ教の保護を約束するのみならず、1943年2月には、カオダイ教のタイニン復帰とサイゴン進出を実現させている<sup>49</sup>。

サイゴンとショロンにカオダイ教青年団の拠点が設置された。その一つがサイゴンを流れるビンドン川に面した日南商船株式会社の造船場であった。昼間、カオダイ教徒の青年たちは「日本商船製造工場」という看板を掲げてカモフラージュをはかったこの拠点で、掲げた看板のとおり日本軍から受注した木造船を建造した。資材は三井物産が供給した。日本軍は出来上がった船に対して、1隻あたり20万～35万ピアストルを支払った。これがカオダイ教青年団の生活・活動資金となった。また、夜は、前年末に創設されたカオダイ教義勇軍（隊長チャン・カン・ビン）として、竹槍を手に軍事教練に励んだ。こうしたカオダイ教の活動を側面から支援していたのが松下光廣であったことは言うまでもない<sup>50</sup>。カオダイ教は1945年3月9日に発動となる「明号作戦」（仏印武力処理）で日本軍に協力して重要な役割を果たす。

「明号作戦」後の統治計画の研究・作成を命じられたのは、林秀澄憲兵中佐であった。林は1944年1月、突然、仏印行きを命じられ、同月末、任地へ向かった。印度支那駐屯軍司令部に着任した林は、仏印武装解除とその後の処理、並びに安南独立運動について研究するよう申し渡された<sup>51</sup>。

以来ほぼ半年、過去の書類に目を通したり、渉外部員として日仏両軍間に生じた問題の解決

<sup>48</sup> Philippe Devillers, *Histoire du Viêt-nam de 1940 à 1952* (Paris: Seuil, 1952), pp. 81-91.

<sup>49</sup> *Ibid.*, pp. 90-92.

<sup>50</sup> グエン・ゴク・ホア「大東亜戦争と日本武士のシルエット」1999年（未公刊）。

<sup>51</sup> 林「インドシナ三国独立の経緯」376～78頁。Bureau Central de Renseignements d'Indochine (abrégé ensuite en BCR), Commandement des Troupes Françaises en Extrême-Orient, "Les services spéciaux japonais, le problème japonais en Indochine" (30 décembre 1946) (Service historique d'armée de terre, Château de Vincennes, France) にフランス語に翻訳された林の日記が所収されている。それによると、林は2月27日に印度支那駐屯軍参謀・岩国泰彦中佐から仏印軍武装解除の研究を、4月26日に同軍参謀長・河村参郎少将から独立運動の研究を要請されている（*Ibid.*, pp. 316, 318）。

にあたりししていた。そんな林の周辺が俄かに慌たしくなってきたのは、7月に入った頃からである。印度支那駐屯軍参謀長・河村参郎少将のもとに大本営陸軍部第4班長・永井八津次大佐から私信が届いた。河村は林を呼び、永井からの書簡を見せた。そこには「安南の独立運動者、独立意識に燃えた者、二、三十名を東京に送ってくれ、人物を選抜し、連れてくるために、ブー・ディン・ジーという男をサイゴンに派遣する」というようなことが書かれていた。また、永井から河村への私信とは別に、参謀次長名で軍司令官宛てに「東京に独立運動者二、三十名密送してくれ」という内容の電文も届いた<sup>52</sup>。

ブー・ディン・ジーは愛国党の情報宣伝部長で、この年、日本を訪れていた。来日の目的は日本のベトナム独立に対する方針を再確認することと、日本にいる独立運動関係者と連絡をつけることであった。ジーはすでに帰国していた山根道一や内川大海の世話で熱海のホテルに「滋井武」という変名を用い、日系二世ということにして滞在した。そこを拠点に、毎日、上京しては内川とともに外務省、大東亜省、陸軍参謀本部などを廻った。しかし、外務省はフランスとの関係を維持するという建前上、独立には反対の姿勢を示し、大東亜省は設立されてから日が浅く、話にならなかった。また、陸軍も日本軍の敗退にどう対応するかという問題で手一杯であり、「ベトナムの独立運動に手を廻すなどの余地はなく、『どうしても勝手にせよ、それどころではない』と突き放され、全く取りつく島もない有様であった。」さらに、ジーは内川と連れ立って、「南一雄」という日本名で世田谷区奥沢に住んでいたクオン・デを訪ねた。「日本におけるベトナム独立運動の最高リーダーに会うというので、大きな期待と希望をもって面会した」が、意外にもクオン・デは62才という年以上に老け込んだ様子で元気がなく、独立運動の志士といった感じではなかった。「積極的に、活動を起こして、独立まで戦い抜くという気迫が見られず」、「結局は日本軍のカイライに過ぎず、これでは真剣な活動家は、ついてこないだろうと判断した。」ジーの滞在は10日ほどの短いものであった。「大きな期待も裏切られ、失望して淋しく」ベトナムへ帰ったのである<sup>53</sup>。

7月10日、そのジーと林がサイゴンの「日本ホテル」(マジェスティック・ホテル)で対面した。ジーは永井の紹介状を持っており、そこには河村宛ての書簡同様、独立運動家を20～30人連れてきてほしいということが書かれていた。林は即答を避け、「今の軍としてはきわめて至難で、あるいは最悪のときは全然、ご期待に応ぜられないかもしれないが、それではあなたの任務は果たせないだろうから、なんとか希望に沿うように努力はできるだけする」と答えて、その場はお茶を濁した<sup>54</sup>。

時を同じくして、ゴ・ジン・ジェムを保護するという問題が起きた。前項で同月13日にジェ

<sup>52</sup> 林「インドシナ三国独立の経緯」379～80頁。

<sup>53</sup> 内川『シルクロードの夢』193～97頁。

<sup>54</sup> 林「インドシナ三国独立の経緯」382ページ、BCRI, p. 291。



ムがサイゴンの陸軍病院に匿われるまでの経過を紹介しているの、以下では、その後のことについて述べる。翌14日、林はジェムと初めて顔を合わせた。この日から二人はほぼ毎日、会うようになる。林はジェムを通じて、ベトナムの政治組織、独立時にとるべき改善方法、さらには内閣が行政命令を発した際にそれが一般の住民まで何時間で到達するかという伝達速度まで詳しく聞き出した。

しばらくして、林はジェムとジーを引き合わせることを思いついた。林は印度支那駐屯軍参謀部の許可をとったうえで、両者を同軍参謀・岩国泰彦中佐の宿舎に招いた。7月22日のことであった。夜9時から夜中の1時45分まで、ジェムとジーを二人だけに話しかけた。彼らはベトナムの独立を志している運動家であるので、当然、意気投合するかと思いきや、お互いに警戒し合って、まったく打ち解けない。これには林も失望してしまった。やむなく、次の会談から双方に顔が利く小松清に仲介を頼んだ。また、林も会談の雰囲気をもたせるためにケーキを差し入れるなどの気配りをした。その甲斐あって、回を重ねるごとに次第に二人の警戒心は薄れていったが、それでも雰囲気が和らいできたのは、ようやく第5回目の会談(8月5日)ぐらいになってからであった<sup>55</sup>。

ハノイ在住の愛国党委員長ゲン・スアン・チューから、東京、もしくはサイゴンへ移動したいという要望が林のもとに舞い込んできたのは8月27日のことであった。自らの身の危険を感じていたチューは、くり返し事の緊急性を訴え、サイゴンへ向かうとの意志を伝えてきた。早速、林も愛国党員と面談するなど問題の検討に取り掛かったが、さほど切迫した事態にないとの判断がなされたのか、解決への足取りは緩慢で、河村参謀長からチュー移動の許可を得たのは10月2日であった<sup>56</sup>。

この頃までに、ゴ・ジン・ジェムとブー・ディン・ジーの会談も20回を越えていた。相変わらず、折り合わない問題は見られたものの、当初に比べれば雰囲気は良くなってきた<sup>57</sup>。そこにジーの上役であるゲン・スアン・チューが加わって、三者会談がもたれるようになった。

そもそもジーと林が接触を始めたのは、ベトナムから日本へ独立運動家を派遣するというのが元々の話であった。20人、30人というのはとても不可能であったので、ジェムとチューの両派から一人ずつ代表を選んで日本へ送ることに決した。チュー派からは愛国党副委員長レ・トアンが、ジェム派からはブー・バン・ナムが派遣されることになった。10月5日頃<sup>58</sup>、両者

<sup>55</sup> 林「インドシナ三国独立の経緯」387～88頁、BCRI, pp. 291-94。

<sup>56</sup> Ibid., pp. 298-99, 302-3, 林「インドシナ三国独立の経緯」389頁。翌3日、林はチューに面会している(BCRI, p. 303)。

<sup>57</sup> Ibid., pp. 300-1。

<sup>58</sup> 林は10日頃としている(林「インドシナ三国独立の経緯」389頁)が、河村は6日に開かれた最高戦争指導会議で報告を行っている(前掲「機密戦争日誌」昭和19年10月6日)ので、林の記憶違いである。河村らの出発は遅くとも10月5日以前である。

は河村参謀長が一時帰朝する機会を利用して、河村とともに訪日した。また、両者が出発するまでの間、上記独立運動家5人はわずかな日数ながら話し合いを持った。そこで、ある程度の意見の一致が見られた。レ・トアン、プー・バン・ナムが出発する直前、彼ら5人は林に面会を求めた。その時の様子を、戦後、林は次のように語っている。

なにかなと思って会いますと、将来安南が独立することがあったら、われわれ五人は協力して日本軍に協力することをお誓いするという声明書を私に提出するという一幕でありました<sup>59</sup>。

ここにおいて、ベトナム北部と中部における親日的独立運動勢力のうち、主要な二派が、とりあえず手を結んだ形になった。

南部における最大の親日勢力であるカオダイ教も林との距離を縮める。カオダイ教側の代表、チャン・カン・ビンと林は10月27日夕、サイゴン憲兵隊本部で初めて対面した。林にしては珍しく、ビンに好感を抱いたようである<sup>60</sup>。「明号作戦」の際に、カオダイ教青年団からなる義勇隊が「神道実践団」と称して日本軍と協同することになるが、この時の対面がその始まりである。また、この約1ヵ月半後の12月14日、松下光廣が林のもとを訪れ、チャン・カン・ビンから日本軍へということで2万ピアストルの寄付金を届けにきたことがある。さすがに林はこれを受け取らず、松下にその扱いを委ねている<sup>61</sup>。

主要なベトナム独立運動家数人と知己を得、彼らとの再三にわたる会談でベトナム独立運動の様相を把握した林は、10月末、帰任した河村参謀長から当時は「マ号作戦」と称されていた仏印武力処理の実施が現実味を帯びてきたので、作戦後の政務について12月10日頃を目処に計画概要を作成してほしいと命じられ、外務省から派遣されていた司政官の佐藤舜と協力して本格的な軍政研究に着手した。警察機構づくりや地方行政組織などについても研究した。ここでも林はジェムらの声に耳を傾けることを忘れなかった。ベトナムが独立した際にどうすべきかを図上研究したり、日本軍司令官が発する布告文の案文をジェムに起草してもらったりした。時にはジェムとの間で意見が対立することもあった<sup>62</sup>。

研究を開始してしばらくすると、林はスマトラで施行されたような軍政を布くことは不可能であると考えようになった<sup>63</sup>。また、独立ということも視野に入れなければならなかった。

<sup>59</sup> 林「インドシナ三国独立の経緯」389頁。

<sup>60</sup> BCRI, p. 305.

<sup>61</sup> Ibid., p. 312. 資金を提供したカオダイ教側の意図は不明である。

<sup>62</sup> 林「インドシナ三国独立の経緯」390～91頁、BCRI, pp. 306-11.

<sup>63</sup> Ibid., p. 308.

その場合の元首に関しては、日本からクオン・デを呼び戻す案に落ち着くのであるが、林はもう一つの選択肢として、レユニオン島に流刑になっていた元皇帝ズイ・タンを考えた<sup>64</sup>。興味深いことに、ズイ・タンに関しては、パリ解放後、臨時共和国政府を樹立し、その首席に就任していたシャルル・ド・ゴールも、同じ頃、バオ・ダイに替えてズイ・タンを復位させようと画策していたのである<sup>65</sup>。

一方、クオン・デを用いることは、先に述べたように、芳沢特派大使らの構想でもある。林は研究過程で、11月に帰朝を控えた芳沢本人をはじめ、横山正幸、蓑田不二夫といった外交関係者と会っている<sup>66</sup>。そうした席で、芳沢らの意向が何らかの形で林に伝えられたとしても不思議はない。しかも、当時、ベトナム現地では、独立を達成した暁にはクオン・デが日本から帰国して即位するということが民衆の間でも常識的に期待されていたのである<sup>67</sup>。

12月に入り、林は作成した計画を印度支那駐屯軍の参謀たちに披瀝した。参謀たちの反応を見るうちに、軍政や軍政下の民事行政が難しいということはもちろん、即時独立も問題がたくさんあると認識し、計画の大幅な変更を迫られた。とりあえず、独立という方向で賛同は得られたが、そこに至るまでにワン・クッション置く必要があるということで、部局長級以上のフランス人行政官を排した後、一時的に日本人がその職務の事務を管掌するという方法を用いて即時独立の形をとるということになった。また、河村参謀長は林の計画に、大旨、賛成しながらも、例えば、中央が蒋介石側との和平を考えていて、トンキンを取り引き材料に使いたいので、仏印中部のアンナンだけの独立を考慮してほしいという意見を出すなど修正を要求した<sup>68</sup>。拳げ句の果てには、印度支那駐屯軍が第38軍に改編されたのを機に、新軍司令官として12月末に着任したばかりの土橋勇逸中将が、クオン・デを用いる案に強硬に反対した。土橋によれば、「その国の主権者というものは内政上でも最も重大な事柄」であり、「干渉は絶対に避くべしというのが私の主義」であった<sup>69</sup>。

結局、林は作成した計画を抜本的に見直さなくてはならなくなった。それはまた、林が1年近くかけて積み上げてきた仏印研究、とりわけベトナム独立運動に関する研究が水泡に帰した瞬間でもあった。

先に述べたように、当時、ベトナム民衆の間では独立が達成された暁にはクオン・デが日本から舞い戻ってきて、バオ・ダイに替わって即位すると当然のようにイメージされていた。実

<sup>64</sup> Ibid., p. 311.

<sup>65</sup> 立川京一「フランスが帰ってくる - インドシナの一九四五年 - 」軍事史学会編『第二次世界大戦(三) - 終戦 - 』錦正社、1995年、231～32頁。

<sup>66</sup> BCRI, pp. 295, 305, 307.

<sup>67</sup> ホア「大東亜戦争と日本武士のシルエット」。

<sup>68</sup> BCRI, pp. 311-14; 林「インドシナ三国独立の経緯」393、396頁。

<sup>69</sup> 土橋勇逸『軍服生活四十年の想出』劉草出版サービスセンター、1985年、528頁。

際、「明号作戦」直後に、サイゴンでは住民たちが「街路に緑地赤玉の『越南復国同盟会』の旗をかたどった大歓迎アーチを作って」、クオン・デの帰国を待ち望んでいたものであり、それが「常識的世論」であった<sup>70</sup>。

この点において、林の計画は妥当であった。ところが、土橋の鶴の一声によってクオン・デ構想は否定され、独立した越南帝国の皇帝にはバオ・ダイが留まることになった。「明号作戦」後、フランスの勢力が一掃された喜びに沸いていたベトナム民衆もバオ・ダイが帝位に留まることを知った時の失望は大きく、日本への信頼もいっぺんに吹き飛んでしまった感があった。つまり、フランスも日本も結局は同じではないかという思いを民衆に抱かせる結果となってしまったのである<sup>71</sup>。終戦前後に民衆の支持が一気にベトミン側へ流れる下地が生まれた要因は、まさにこのあたりにあるのではなからうか。

おわりに

今日のベトナムでは第二次世界大戦期を日本とフランスに二重に搾取された時代と認識しており、それを象徴する「一つの首に二つの首枷」という表現が使われている。また、歴史教科書には、「ファシスト日本」という記述が再三にわたり認められる。これは善意に解釈すれば、当時の日本が、ある種、特別な状況にあったということの意味しているように受け取れる。しかし、だからといって、こうした歴史教科書の記述が我が国に対するイメージに良い影響をもたらすとは考えられない。ベトナムがフランスの植民地統治から「最初の独立」を果たしたのは、日本軍が「明号作戦」を発動し、フランスの勢力を一掃した結果である。にもかかわらず、なぜ、上記のような日本にとって好ましからざる歴史認識が生まれたのであろうか。

第一に、その理由は「仏印静謐保持」という第二次世界大戦中に日本が採用した政策に求められる。日本軍の北部仏印進駐に呼応して「越南復国同盟軍」やカオダイ教など複数の独立運動勢力が蜂起した背景には日本に対する期待があった。つまり、日本が独立を目指す自分たちの味方となり、フランスを打倒してくれるのではないかという期待である。ところが、日本は独立運動勢力を支援するどころか、作戦上の理由を優先させてフランスとの協力の道を選び、フランス当局による独立運動弾圧に対して見て見ぬ振りをしたのである。

北部仏印進駐から「明号作戦」に至るまでの約4年半の間、自ら課した「仏印静謐保持」方針に縛られた日本軍と外務省（大東亜省）は、たとえ心情的に独立運動に共鳴していたという側面があったとしても、独立運動を公に支援することはできなかつたし、独立の期待を抱かせ

<sup>70</sup> 西川寛生「大川先生とクオン・デ殿下」『大川周明顕彰会報』No.24（1997年6月）7頁。

<sup>71</sup> 井上吉三郎氏への聞き取り調査。

るような言動すらも慎んだのである。例外的に、憲兵隊が弾圧されそうになった独立運動家を保護するなどしたものの、全体から見れば、極めて限定的であったことは否めない。唯一、カオダイ教への支援だけが、長期的、かつ、一貫性を持った活動であった。

いずれにせよ、仏印における独立運動勢力への基本的な非支援は、他の東南アジア地域における日本の行動とはまったく異なる。日本は「大東亜共栄圏建設」や「アジア解放」を標榜して対米英蘭戦を戦った。しかるに、「仏印静謐保持」は日本が掲げたこれらの戦争目的とまったく矛盾する方針であった。当時の日本の対アジア政策がいかに日和見的、場当たりの、あるいはご都合主義で一貫性を欠いていたかを証明する事実である。

第二に、「明号作戦」後の独立した政権において、フランスかぶれと揶揄されるほど親仏的で民衆に人気のなかったバオ・ダイを退位させずにそのまま国家元首としたことにも問題がある。当時のベトナムでは、独立を達成した暁には日本に亡命しているクオン・デが帰国して即位すると当然のように考えられていた。林秀澄が作成した最初の計画でもクオン・デ政権を樹立することになっていたのである。林の案を拒否した土橋勇逸の内政不干渉という考えも筋は通っている。しかし、この場合はそれが裏目に出た。バオ・ダイがそのまま皇帝の地位に留まったことは民衆の失望を招いた。日本も結局はフランスと同じではないかということになってしまったのである。日本を「ファシスト」とし、フランスを「帝国主義」として同時に抵抗の対象としていたベトミンに民衆の支持が一気に流れていく下地はこうして生まれたと言えよう。日本は「仏印静謐保持」方針に固執して長くベトナムに独立の希望と機会を与えなかったのと同様、民意を汲み取るという点でも失敗したのである。

#### 註

本研究に関連して、聞き取り調査に応じて下さった方々の氏名、戦争当時の所属（肩書き）、調査日は以下のとおりである（調査順）。

石川良孝（仏印特派大使府）…平成8年1月31日、平成12年10月26日。

井上吉三郎（外務省留学生）…平成8年2月9日、16日、4月17日、平成9年7月25日、  
12月9日、平成12年3月8日。

山崎剛太郎（在フエ領事館）…平成8年3月8日。

竹崎宇吉（大南公司）…平成8年7月9日、10月28日（電話）  
12月17日（電話）、26日（電話）。

加登川幸太郎（第38軍参謀）…平成8年8月20日、9月13日。

西川捨三郎（大南公司）…平成8年8月21日、29日、10月2日、  
平成9年11月12日、平成10年6月16日。

石田昌男（在フエ領事館）...平成9年3月4日。

小林慶三（外務省留学生、仏印特派大使府）...平成9年10月31日、平成10年1月22日。

グエン・ゴク・ホア（カオダイ教青年団）...平成10年1月10日、平成12年3月8日。

関口俊吾（日本文化会館）...平成11年4月20日、8月3日、9月11日、平成12年10月26日。

加藤健四郎（大南公司）...平成12年9月19日。